
ないしょの贈り物

叶愛夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ないしょの贈り物

【Nコード】

N8573A

【作者名】

叶愛夢

【あらすじ】

大好きなママを亡くしてしまった風花。彼女は幼くて死を理解出来なかった。パパから『ママはお空に行ったんだ…』と教えてもらってから風花は空ばかり眺める様になった。晴れ渡る青い青い空を…。

「風花……ママはお空に行っただ……」

悲しそうにパパは言った。

「…お空……？」

あたしはそう繰り返して空を見上げた。

晴れ渡る青い青い空を……

『ないしょの贈り物』

その日の空は、とても綺麗だった。

まるで、海みたいに青く澄み渡っていて、そこを白いふわふわの雲が気持ち良さそうに泳いでいた。

時折吹く春風にたくさんの桜の花びらが舞い散り桃色の雨が降った。

あたしとママの大好きな花。

けど、今はその花を見て喜ぶ気になれない。

だつて……

……まだ若いのに……、あまりにも突然だ……

……小さいお子さんもいるのに、不憫だ……

そんな声がチラチラ聞こえた。

今の美しい景色と似つかわないう重苦しい黒い服に身を包んだ大人達の姿があつた。

彼らは、噤り泣きながら言った。

でも、あたしは何も言わずまた涙も流さずに黒いスーツを身に纏っているパパに視線を向けた。

パパは、黙って空を見ていた。

高くそびえ立つ煙突を……。

黒い煙を吐いて空へと昇っていく様を……

「……パパ……」

淋しそうな表情で空を見ているパパの大きな手をギュッと握ってあたしは呼び掛けた。

パパはゆっくりとした動作であたしに目を下ろし“何だい？”と尋ねた。

「……ねえ、ママはどこに行ったの……？」

あたしのこの一言にパパの瞳は悲しげに揺れた。

パパはあたしの視線に合わせてその場にしゃがんだ。

「風花^{ふうか}、よく聞いて……ママは……」

パパは下を向いて静かな口調で呟く。

ひどく悲しそうなパパ……。

よく分からなかったけど、そんなパパを見てあたしまで悲しく切な
くなった……。

「……パパ……？ 何で泣いているの？ ……ママはどこに行った
の？」

しゃがんで目頭を押さえてるパパの頬にあたしは触れた。

子供ながらパパが泣いている姿はひどく胸が痛んだ……。

あたしまで、悲しく寂しくなる。

すると、パパは泣きじゃくりながらあたしを強く抱き締めた。

パパのスーツからタバコの苦い香りが鼻を掠めた。

それから……おばあちゃん家でよく香るお線香の香りがした。

パパの腕の中でパパが泣き止むまであたしは待った。

暫らくしてパパはゆっくりと腕を解き、涙で腫れた赤い目であたしを見据えた。

「風花、……ママは……ママは、……遠くに行ったんだ……」

あたしの髪を優しく撫でながら穏やかな口調でパパはゆっくりと話してくれた。

「……？ とおく……？」

パパの言葉にあたしは首を傾げて、繰り返した。

「……そう……遠く……」

パパはゆっくりと立ち上がった。

「とおく……？ パパ？ とおくってどこ……？ ふつか、ママに逢いたいよ……」

あたしの一言にパパの表情は悲しく曇った。

まるで、今にも雨が降りそうな雨空の様に……。

「…風花、ママは……」

戸惑った表情を浮かべて、パパは困惑した様子で言葉を探した。

「……お空に行ったんだ……」

パパはそう言って空を見上げた。

「……おそろ……？」

そう繰り返してあたしも空を見上げた。

そこには白いふわふわの雲が海みたく青く澄み渡った空の上をゆっくりと流れていた……。

ママがお空に行ってしまった……。

それは優しいパパが幼いあたしに教えてくれた優しい真実……

けど、幼かったあたしは……

「風花ちゃん」

廊下の窓ガラスから空を眺めているあたしに担任の先生が声を掛けた。

あたしはゆっくりとした動作で先生に目を向けた。

「何をやってるの？」

先生と言ってもまだ若く優しくそうなお姉さんみたいな先生。

愛らしい笑顔をあたしに向けた。

先生の笑い方、少しママに似てて……見てみると、寂しくなる……。

「……お空見てたの……」

あたしはまた空へと視線を戻して答えた。

「そっか。うーん、今日は雲一つない綺麗な青い空ねー！ 気持ちいいわ」

先生はそう言って体を伸ばした。

「うん、けど……雲一つないのにママはどこにも居ないんだよ……」

「……ママ……?」

先生はあたしの視線に合わせてしゃがんでくれた。

「うん、……あのね、ふうかのママお空に行ったんだ……。パパが
そう言ってたの。だから、お空に行ったママを捜してるの。早く、
お家に帰ってきてって……ママに言いたいの……」

あたしの話を聞いて先生は悲しそうな表情を浮かべた。

「……せんせい……ママはどこにいるの？ どうすれば逢えるのか
な？」

——嫌いなレーズンをちゃんと食べたら逢える？

テレビばっか見てないで、すぐにお風呂に入ったら逢える？

いい子にしてたらママは帰ってくるの？

あたしのその問いに先生はひどく困惑した表情を浮かべた。

いつも満面の笑顔で答えてくれる先生なのにどうしたんだろう……。。

「……風花ちゃん……」

暫くして先生は口を開き何か言おうとした。

が……

「^{まっおか}松岡せんせい！ 大ちゃんとうちゃんが喧嘩してるの！ で、
ようちゃんが泣いちゃったの！ 来て！」

タイミング良くクラスの子がそう言って先生の手を引っ張った。

「えっ……！ ちょっと……」

松岡先生はクラスの子達に手を引かれ転びそうな足取りで喧嘩の仲裁に行ってしまった。

あたしは先生が見えなくなるとまた窓越しから空を見上げた。

雲一つない澄んだ青い空を……

とても綺麗で優しくて……

まるで、ママみたいだった……

「ほーら、風花！ 夕飯だぞ！ 今日は何と目玉焼き！」

パパはテレビを見ているあたしにそう呼び掛けた。

ママがお空に行ってから、パパは、前よりさらに忙しくなった。

慌ただしい様子で家に帰ったかと思うと背広のまま夕飯を作っていた。

「頼むから早く来て」

パパの呼ぶ声が強くなる。

あたしは何も言わずにテレビを消してテーブルに向かった。

「今日は、って昨日も目玉焼きだったよ。それに……この目玉焼き真っ黒だよ。」

形の悪い目玉焼きを見ながら椅子に腰を下ろしあたしは溜め息を吐いた。

「なあーに、ちょっと香ばしい方が美味いんだって！ それに歯応えもあるし」

パパはそう笑いながら向かいの席に腰を下ろし箸を持って頂きますと言った。

「……………」

あたしは、そんなパパの椅子の横に目を向けた。

パパの隣にはいつもなら、ママが座っていて優しい笑みを浮かべていた。

……けれど、今は空気だけが座っている……。ママの席だけからっぽなの……。

テレビを着けてないから、リビングは張り裂けそうに静か。

前はこうじゃなかったのに……。

パパはカリカリに焼けた目玉焼きに醤油をたっぷり掛けた。

けど、あたしは箸を持たずに、パパの作った目玉焼きを無言で見つめていた。

「風花？ 食わないの？」

そんなあたしに気付いたパパは心配そうに声を掛けた。

「ふうか、ママが作った目玉焼きが食べたい……」

俯きながら声を洩らすあたしにパパは戸惑った様子を浮かべた。

「……………うわっ！ 風花、今日の目玉焼き、昨日より美味いぞ！

黄身が堅焼けでボソボソして喉に引っ掛かる感じが最高に美味いぞ

！」

暫らくして、パパは目玉焼きを美味しそうに食べた。

あたしはただ黙り込んで下を向いていた。

「本当に美味いぞ！　なら、食べさせてあげようか？　風花、ほら、あーん」そう言ってパパは箸で固焼けの黄身を摘んであたしの口元に運んだ。

「……………いない……………」

あたしはそう言って首を横に振る。

「遠慮すんなよ！　ほら。」

パパは笑って食べるように薦める。

「嫌！　いない！」

あたしはそんなパパの手を払い除けてしまった。

ベチャ！

パパが作った形の悪い目玉焼きはフローリングに落ちた。

「……………あつ……………」

手を払いのけてしまった事にパパは悲しそうな表情を浮かべた。

そんなパパの表情に罪悪感が突き刺さる。

「……………ゴメンなさい……………」

そう一言、素直に謝ればいいのに唇が動いてくれなくて……………。

あたしはパパから視線を逸らし無言で俯いた。

パパは、何も言わず、黙って床に落ちた目玉焼きの片付けをしていた。

不気味な程静かなリビングに食器を片付ける音が鳴り響いた。

……………ママがお空に行ってしまったから一週間が経った。

ずっと空を見ているのにいつまで経ってもママには逢えない……………。

何で……？

寂しいよ……

淋しい……

サビシイ……

ママに逢いたい……

ただ、それだけなの……。

どうすれば逢えるの？

神様、教えて下さい……

“いい子”にして居れば逢えますか？けれど、あたしの願いは虚しく……空はママを映す事なくゆっくりと雲が流れていた……。

この日、パパは朝から慌ただしかった。

あたしはいつもより早めに起こされて、まだ寝ぼけたままの胃にコンフレークを詰め込んだ。

朝食を食べているあたしにパパはこう告げた。

「今日帰りが遅くなるから夕飯作れないんだ。だからコンビニのおにぎり買って置いたから、それ食べて。お風呂は赤いボタン押せばお湯が湧くから。あと寄り道せずに真っ直ぐ帰るんだよ。呼び鈴鳴っても絶対に出ちゃ駄目だから」

そう早口で言いながらパパはネクタイを締めた。

そうして、コーヒーを流し込む様に飲み干してパパは家を出て行った。

一人残されたあたしは、ボタンと閉まるドアを見つめていた。

コーンフ레이크のミルクを飲み干しあたしは、真新しい赤いランドセルを背負って学校へと足を進めた。

授業は気付いたら終わっていた。

あたしは窓から空を見てあたしの日課であるママ探しをひたすらしていた。

けど、やっぱりどこにも居なくて……。

代わりに白くて美味しそうな雲を見つけ、“ソフトクリーム”みた
いだなあと考えていたら松岡先生に注意された。

『こら、よそ見はいけないぞ！』　って教科書で軽く頭を叩かれた。

今日の給食は大好きなカレーだった。

フルーツサラダも出た。

嫌いなレーズンが入ってて、食べるのに苦戦した。

でも、頑張って二つは食べた。

残りのレーズンは先生の目を盗んで床に落とした。

全部、ママに話したい。

ママに聞いてもらいたい。

床に落したりするのはいけないって注意してもらいたい。

けど、二つも食べて偉いねって頭を撫でて貰いたい……

それすらも、もう叶わないの……？

「先生、さようなら！ みなさん、さようなら！」

授業が終わってみんな嬉しそうだった。

“ おやつ食ったらまたここに来てドッジボールをするぞ！”とか
今日、ママがクッキー焼いてくれるんだ”と楽しそうに話している
声が耳に付いた。

あたしは、その輪に入れなくて……さつさと帰り支度をして学校を
後にした。

瞳をキラキラさせて廊下を走る男の子達を余所に、あたしは、静か
な足取りで家に足を進めた。

ママやパパじゃなく、コンビニのおにぎりだけが待っている家に……

学校の帰り道、外はポカポカ陽気。桜の花もまだ咲いてて風に舞う。

交通安全の旗を持ったおじさんやパトロール中のお巡りさん。
ポカポカ陽気のお陰で街行く人もニコニコ笑顔。

笑ってないのはあたしだけ……。

ポカポカなお日様と裏腹にあたしの表情は曇り空。

「ハア……」

——帰ったら何をしよう……？

一人静かに溜め息を吐いたあたしはある物に目が行った。

「……なんだろう……？ これ……？」

あたしは首を傾げた。

普段通る道……今朝も通った道……

なのに気付かなかった……

あたしが呆気にとられて見ていたのは真っ赤な自販機。

自販機といっても背が低い。あたしより小さい。まるでポストみたいな小さな自販機……

しかも、売ってあるのは缶ジュースじゃないみたい。

「何だろう……？ これ？」

自販機を覗き込むと、赤い缶が見えた。お茶の葉っぱが入ってる缶によく似た赤い缶……

あたしは気になってその不思議な自販機に手を伸ばした。

丸い小さなボタンがあって好奇心で押してみた。

すると……

ガタン！

取り出し口に赤い缶が横たわっていた。

「……………」

目をパチクリさせながら、あたしはそれを取り上げた。

意外に軽くてびっくりした。

中に何が入ってるのか、気になってあたしはその缶を振ってみた。

けど、音がしない。無性にそれが気になったあたしはそれを持ち物袋の中へと押し込んだ。

不思議な赤い缶を持ち帰ったあたしは家に着いてすぐにそれを開けた。

その缶の中身は……

「……………？…ふうせん……………？」

中には一枚の赤い風船が入っていた。それから白紙の手紙……

あとは説明書と書かれた薄っぺらい紙のみ

あたしは何なのかさっぱり分からない。

とりあえず、説明書を読んてみた。

『あなたの願いを叶えますこれは魔法の風船。どんな願いでも一つは叶えてくれる不思議な風船。満月の夜この手紙に叶えてほしい願いを書いて風船に付けて夜空に送って下さい素敵な事が起こります……』

そう書いてあつた。

子供のあたしにも分かる様に、ちゃんとイラスト付きで。

あたしは、ぐしゃとそれを丸めて乱暴にごみ箱に投げ入れた。

無性に苛ついてベッドに横たわって目を閉じた。

——こんなの嘘だ……

叶いつこないんもん。

もうママは居ないんだもん

本当は解っていた……。

この世にママが居ない事……

もう二度と逢えない事……

あの優しい笑顔であたしの髪を撫でてくれる事も出来ない事も……

本当は全部解っていた……

けど、それでもママを捜さずにはいらなかった。

そうしないとママがこの世に居ないのを認めてるみたいで……

恐かった……。

窓から心地良い風が入り込む。

あたしの頬や髪をママの代わりに撫でてくれてるみたい……

それがひどく優しくて……

胸が詰まる程切なかった……。

自然と涙が零れた。

空には朱い夕焼け雲が広がっていた……

あたしは、ムクツと体を起こしてもう一度机に座った。

鉛筆を握って願いを文字にした。

願いはもちろん……

『ママにあいたい』

あたしの願いはただ、それだけ……

自分でも馬鹿だと思う。

こんなのを信じる自分に……

けど、いいの。夢でも幻でも一瞬でもいいの。

ママに逢いたい……。――

風船を膨らませてさっき書いた手紙を括り付けて優しい夕焼けが浮かぶ空へと送った。

風船はふわり……と浮いて空に向かっていった。

まるで……空に呼ばれてるかの様に……

あたしはひたすら願った。ママに逢いたい……

ママに逢いたい……

ママに逢いたい……

強く強く想いながら頬を涙で濡らしてそれを見送った。

そんなあたしを夕焼けで朱く染まった風が優しく撫でた……。

窓から小鳥の囀りが耳に付く。

あたしは重い瞼を擦りベットから体を起こした。

どうやらあのあとすぐに寝てしまった。

あたしの目と耳にはいつもと変わらない光景と音が広がる。

薄いピンクのカーテンから日差しが洩れて近所の家の声がする……

あくびを一つして体を天まで思い切り伸ばす。

すると、ふわっと鼻に美味しいそうな目玉焼きの香りが立ち込める。

あくびを押さえながらお腹空いたなと呟いた。

——ん……？

鼻をひくひく動かしながらあたしはある事に気付いた。

——今日の目玉焼き焦げ臭くない……パパ、目玉焼きマスターしたのかな？

首を傾げながらあたしは、部屋を出た。

「……え……？」

リビングに降りてあたしは自分の目を疑った。

思わず、目を擦った。それも力いっぱい……

けれど、あたしの視界は変わらなかった。

「……………うそ……………」

そうあたしは呟いた。

だって、あたしの瞳にはお空に行ってしまったはずのママの姿が映っていた。

一人呆然と立ち尽くすあたしにママはクスクスと笑いながら尋ねた。

「風花、何が嘘なの？」

ママは花の様に可憐に微笑む。

——…だって…ママは…

思わず、そんな言葉が溢れ出す。

…が…

上手く口に出来ない。

あたし、夢見てるのかな……？

あたしは泣きながら笑った。

——夢でもいいよ……

幻でも幽霊でも……

ママに会えた事が……

ママの声が聞こえた事が……

素直に嬉しかったから……。

「っママ……ママあああ！」

泣き叫びながらママの腰にしがみついた。

涙のせいでママが滲んでよく見えない。

「……え、ちよつと風花？」

そう戸惑った表情を浮かべながら、ママはあたしの髪を優しく撫でてくれた。

「……何？ どうしたの？ 風花？」

ずっと聞きたかった優しい声が降り注ぐ。

まるで、オルゴールみたいに優しく響く。

「怖い夢でも見っちゃった？」

——……ユメ……？

……ああ……そうか、ユメだったんだ……。

ママがあたしを置いて一人でお空に行くなんて……

きつと悪い夢……。

だって、ママはこんなに暖かくてセツケンの香りがしてるんだもん。

……あたしは、ずっと怖い夢を見ていたんだ……。

ママの服をギュッと握りしめる。

——もうどこにも行かないで……と祈りに似た想いを込めて……

この日あたしはママにべったりだった。

何をするにもママの後をくつついていた。

だって、不安だったんだもん。

目を離れた隙にママが消えちゃいそうで……。

ママは優しい笑みを浮かべてあたしのわがままに答えてくれた。

次第に空は暗くなり、星がキラキラと瞬く。

あたしは、ベットに横になってママに絵本を読んでもらった。

久しぶりに聞いたママの声は変わらなくて安心した。

「……ママ……」

絵本を読んでるママに声を掛ける。

「ん？ なぁに？」

優しい眼差しであたしに布団を掛けてくれる。

何気ない事なのに涙が出る程嬉しかった。

「あのね、ふうかね怖い夢を見ていたの。」

「怖い夢？」絵本を閉じて話しに耳を傾けるママ。

「……………そう……………怖い夢、ママが居なくなっちゃう夢……………ママ一人で空に行っちゃって……………二度と会えなくなっちゃうの……………けど、ママはここにいるもん……………」

あたしが安堵に似た口調で言うとママは真剣な表情で口を開いた。

「ごめんね……………風花……………」

その時のママの表情は本当に悲しそうで辛そうだった。

「…………え…………？」

あたしはママの“ごめんね”の意味が解らなくて目を丸くした。

うつん、本当は心のどこかで解っていたけど……

…………解りたくなかった…………。

「…………それは夢じゃないの…………」

ママは下を向きながら言葉を紡ぐ。

その声が、辛そうに震えていた…………。

「本当は、ママはここに居ちゃいけないの…………。でもどうしても風

花やパパに逢いたくて……、一目でも良いから逢いたくて……神様に、ないしょで来ちゃったの……」

ポタポタとママは涙を零しながら言葉を紡いだ。

その声が涙で震えてて……とても、か弱く見えた。

「けど、もう帰らないと……。短い時間だけど風花に会えてよかった……いっぱいお手伝いができる様になって、素敵なお姉さんになったのね……。ママ、とっても嬉しい……。……これなら……ママが居なくても平気ね……」

そう言って泣きながらニコツとママは笑みを浮かべる。

泣いたママの顔をあたしは生まれて初めて見た。

それがひどく切なくて……

悲しくて……

やり切れなかった……

なのに、ママの笑顔は今まで見せてくれた中で一番綺麗だった……

「……いや、嫌……嫌!! 行っちゃイヤッ!」

身体を起こしてママに抱きつく。

あたしの目にも涙がどんどん溢れ出す。

一生分の涙を使ってしまう程……

あたしは泣いた。泣きすぎて目は痛いし、喉が張り裂けそうなくらい声を振り絞り泣き叫ぶ。

「イヤッイヤッイヤッ!! 行っちゃ嫌……ック……」

ママの腕にしがみついてあたしは顔を埋める。

「……ごめんね……」

ママはそう一言呟いてあたしの髪を撫でた。

「嫌……ママが行くんなら……ふうかも一緒に行く……」

あたしは顔を上げてママを見つめた。

「……駄目、絶対に駄目……」 険しい声と真剣な眼差しであたしを見つめる。

「いい？ 風花、ママと風花は住む世界が違うの……それに風花が行っちゃったらパパが一人ぼっちになっちゃうでしょ？ 風花は、ママの代わりに永く生きて……パパと仲良く暮らしてね……」

そうママは優しく微笑むとスウーと薄くなる……

と同時にあたしの身体は動かなくなった。

「いやあ！」身体をいくら動かしても言う事を聞いてくれなくて……。

そんな光景をただ見つめる事しか出来なかった……。

「ママあああ！」

あたしは声を振り絞って消えていくママに手を伸ばした。

けれど、ママに触れる事は出来なかった。

——…知らないかった……

人との別れがこんなに辛いなんて……

永遠に会えなくなる事が、こんなに淋しい事なんて……

知りたくなかった……

「……か……」

「…………風花…………！」

——ん…………？

誰かが身体を揺さぶる……

……誰…………？

あたしは、瞼をゆっくりと開ける。

すると……

パパの顔があつた。

あたしは目を擦りながらパパに視線を向ける。

「ダメじゃないかー！　机で寝ちゃ！　風邪引くだろう！　しかも
ご飯も食べずに！」

そう言ってあたしのおでこをこずく。

……え……？

よく辺りを見渡すとあたしは自分の机に伏せて寝ていた様だ。

遠くの空は薄つらと紺青色に染まっていた。

学校から帰ってからまださほど経っていないのが分かった。

——え？ どういう事？

あたしはキョロキョロと辺りを見回す。

不思議な事に、あの赤い缶はどこにもなかった。

眉を潜めるあたしにパパは髪をくしゃと撫でる。

「……まあ、仕事何とか早く終わったから今から夕飯にするか。コンビニのおにぎりじゃなくパパ特製の目玉焼き！ 今日トロトロ半熟のを作るぞ！」

そう明るい口調で言うてはあたしの部屋から出ていった。

「……………」

あたしはイマイチ状況が理解出来なかった……

今までの事は夢……………？

ママに会えたのも……………やっぱり、夢だったんだ……………

解っていたのにそう思うと切なくなつて……………

また目が熱くなる……………。

けど、泣き顔をパパに見られたらまた心配掛けちゃう……………。

あたしは強く涙を拭い、腰を上げた。

すると……

ハラリ。

一枚の手紙が床に落ちた。

「え？」

あたしはそれに気付きしゃがんでそれを拾いあげた。白で無地のシンプルな便箋……

開いてみるとそこには……

懐かしいママの字……

『風花へ

ずっと、ずーっと……見守っているからね……』

そう綴ってあった。

我慢していた涙は簡単に零れ落ちた。

ポロポロと止まる事なく頬を伝う。

あたしはママからの手紙を抱きしめ声を上げて泣いた。

この日を境にあたしは空を見る事はなくなった。

代わりにパパと一緒に台所に立って仲良く料理をするようになった。

——……見守っていてね……、ママ……

あたしは、頑張って生きるから……

ママがくれたないしょの贈り物を心にしまっ……

頑張るから……。

だから……

空から見守っていてね……

ずっと、ずっと……いつまでも……

あたしはそう空に向かって呟いた。

今日の空も晴れていた。

海みたく青く澄み渡る空をふわふわの雲が流れていた……。

ゆっくと……

優しく……

穏やかに……

『ずっとずっと見守ってるから……』

f.i.n

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8573a/>

ないしょの贈り物

2010年12月3日05時47分発行